

■ 明けましておめでとうございます。

新しい年になりました。本年もよろしくお願
いします。

さらに、本号は「会報 史談」の50号です。
新春第1号が記念の号となりますことを喜びた
いと思います。

■ 史談会研修旅行が開催されました。

白鷹町史談会恒例の「文化財めぐり（研修旅
行）が、芭蕉の足跡をたどってみることと最上
の文化を知ることの2つをねらいで下記よう
に実施しました。さまざまな行事が重なり、少
ない人数でしたが、楽しく過ごすことができ
ました。



1 期日 平成29年10月25日（水）

2 時間

集合 午前7時50分

荒砥地区コミュニティセンター

出発 午前8時

解散 午後5時30分

3 見学地

①大石田最上川河岸（大石田町）

②大石田町立歴史民俗資料館

（「聴禽書屋」）

③境田分水嶺（最上町）

④封人の家（最上町）

⑤富山馬頭観音（最上町）

（最上33観音31番札所）

⑥新庄市ふるさと歴史センター

参加しての感想を、岡村みゆきさんに寄稿し
ていただきました。

■ 研修旅行に参加して

岡村みゆき

（横田尻在住）

今回、史談会の方から「普通の旅行では見学
できないような所を見てこられるから、参加し
ないか」とのお誘いを受けて、史談会の研修旅
行に初めて参加させていただきました。

史談会の方々の会話についていけるかなとい
う不安があったのですが、とてもなごやかな雰
囲気で楽しい有意義な一日を過ごすことができ
ました。



大石田町立歴史民俗資料館は、いつもの見学な
らさっと見て終わってしまうような民俗資料館

ですが、係りの方から詳しく説明してもらい、大石田が最上川舟運の中継地で「大石田河岸」として栄えていたことを絵図を見ることによって知ることができました。また斎藤茂吉が大石田疎開時に住んでいたという「聴禽書屋」で多くの秀歌が生まれたとのこと。部屋の片隅に置いてあるボロボロになっていた机を見て、この寒い部屋で少しの暖を取りながら歌をつくり続けていた後姿が目に見えてきました。

最上町の「封人の家」では芭蕉が座ってお茶を飲んだという囲炉裏を囲んで、おいしいお茶をごちそうになりながら、当時の様子を、ユーモアをたっぷり入れた語り口でお聞きしました。鉄瓶でわかしたお湯で入れたお茶がまるやかで、すごくおいしかったのにびっくり、心まで温かくなりました。



いろいろな所を見てまわり、詳しい説明を聞くことにより、いつもなら何げなく通り過ぎてしまう所もそれまでの歴史を感じることができました。昼食には新蕎麦もごちそうになり、お腹も心も満腹の研修旅行でした。ありがとうございました。

[研修旅行裏話(文責 守谷英一)]

1 大石田ではなんとしても回らなければならない所があるということで、時間をやりくりして回ったところがあります。それは、この写真の場所です。



そのころは、「歴史より団子」。

2 移動の車内での会話のキーワードは、「分水嶺」。ある人の曰く、「オレの人生の分水嶺は、結婚した時だったなあ。あれが分かれ目だった」。そのよし悪しは詮索しません。

■ 観音寺観音堂保存修理報告会 (史談会研修会) を開催しました

観音寺観音堂(深山観音堂)の屋根の葺き替え工事が完了しました。その報告会を史談会の研修会を兼ねて行いました。



1 日時 平成29年11月12日(日)
午前10時から12時まで
2 会場
鮎貝地区コミュニティセンター

(ハーモニープラザ)

3 内容

- ① 観音寺観音堂保存修理事業報告
教育委員会 斎藤久美子
- ② 観音寺観音堂千手観音像のルーツ
史談会副会長 平吹利数



これも、さまざまな行事が重なり、参加者が少なくて残念でした。けれども内容としては深まりのあるものだったと思います。

■ 史談会研修会を開催します。

今年度の研修会を下記のように開催します。会員だけでなく、一般の方々にも参加を呼びかけますので、どなたでも参加できますので、お声がけをよろしく願います。

- 1 日時 平成30年2月17日(土)
研修会：午後1時30分～3時15分
懇親会：午後3時30分～5時
- 2 会場 荒砥地区コミュニティセンター
- 3 内容
 - ① 黒鴨の古民家に残された資料の調査について(石井紀子)
 - ② 矢内原忠雄の講演会のこと(丸川二男)
 - ③ 白鷹町の地史について(加藤晃一)

- 3 参加費 研修会：無料
懇親会：会員 1,000円
非会員 1,500円
- 4 申し込み 2月9日(金)まで、
教育委員会 生涯学習・文化振興係へ
☎85-6146

■ 「会報 史談」50号によせて

先に記しましたが、この号は「会報 史談」の50号です。1号から24号までは丸川二男さんが編集していました。25号からは、守谷英一が編集しています。第1号の発行が、平成20(2008)年の8月5日で、24号が平成24(2012)年の6月20日ですから、ほぼ2ヶ月に1号発行されていたこととなります。

私(守谷英一)が編集することになって、25号の発行は、平成24(2012)年の8月25日で、30号が平成25(2013)年の6月25日、36号は平成26(2014)年の9月2日発行という具合で、このあたりまではほぼ2ヶ月おきに発行しています。42号は、平成28(2016)年の5月10日の発行になっていますから、ここで、3か月おきぐらいにペースが落ちます。

48号は平成29(2017)年の5月22日の発行ですので、少し持ち直してきました。ですから本来、50号は今年の9月ぐらいにでていなければならないはずですが、それが、今日まで延びたことは反省しきりです。

振り返れば、いろいろな思いがあります。この50号分だけでも形としておきたいなど考えているところです。

さて、最初の編集者である丸川さんから書いていただきましたので、掲載します。

■ 会報 50号、何がめでたい

丸川二男

かつては年1回出ていた会誌の『史談』が、経費や原稿のやりくりから、発行を2年に1回とせざるを得ない状況になったことから、会員の作品発表の機会、会の運営についての連絡や報告などを目的に「会報」を出しはじめたが、この号で50号になったというのである。

普通なら「おめでたい」というべきなのかも知れぬが、今ふうに言えば「何がめでたい」となるか。これを発案して、出し続けてきたもの1人として改めて考えてみると、やはり紆余曲折があり、当初考えていたことが実現されていないことがいくつかある。

その前になんといっても世間並みの高齢化のせい、会員の自然減が止まらない。これは思っている以上に深刻である。近い将来「自主解散」などという場面が出てくるかも知れない。それには「会の敷居が高い」とか、「話が難しい」とかの話が耳に入ってはくるが、これに限っては今のところ有効な対策はない。

今までの会報をめぐってみる。一応この会報は開かれた場であり、内容もきわめてラフなもので、何の制約もない。しかし、いったい何人が書いているか。会員のごく限られた人の名前しか見えないのはやはり寂しい。

私としてはこの土地の季節の便りや、日常の衣食住についての細かな記録があってもいいと思う。それをさしおいていわゆる「学問」などありはしないと思っているのだが……。

いいこともなかったわけではない。いわゆるインターネットの普及により、この「会報」が町のホームページから全部の号を全国のどこでも、しかも写真は鮮やかなカラーで見ることができるようなのは何よりというべきか。かつては短歌誌の「北土」が100号を出していたし、現に白鷹町山岳会も「会報」の号数を重ねている。それに負けずに……などというのは荷が重過ぎることだろうか。

■ 『荒砥町史』拾い読み(1)

守谷英一

若い会員の石井紀子さんに、若い人たちの心をつかむにはどうしたらよいかと尋ねたとき、歴史にはあまり興味がなくても、物語には興味があるようですよと教えられた。

この1年間、ゆえあって、『白鷹町史』などの先人たちの仕事をかなり真剣に読み込んだ。その中から、少し物語風に紹介することで、この土地の歴史に、興味を持って貰えないかと考えた（そして、史談会に入って貰えないかという下心も、当然ある）。

上手に行くかはわからないが、そんなことを少し試みようと思う。ネタ本はしばらくの間は『荒砥町史』（昭和29年 1954年 長岡規矩雄編）を使ってみようと思う。

最初は、天保2（1832）年の山辺の芝居騒動。上杉藩4代藩主の上杉綱憲（うえずぎ つなのり）は、有名な「忠臣蔵」の敵役、吉良上野介（吉良 義央 きら よしひさ／よしなか）の子どもである。そのため、当時の上杉藩は、「忠臣蔵」人気で盛んになった芝居の領内での上演を禁止していた。そんな中、となりの最上領の山辺で、10月6日に芝居がかかるという。

領境の荒砥の役所は大騒ぎ、住民の中に禁令を破り、藩境を越えて、こっそり芝居を見に行くやつがでたらたいへんだということで、坂初右衛門、玉川七之丞、高橋三郎兵衛を萩野、中山の番屋に、横山左織、玉川藤十郎を小滝番屋に出張させて取り締まることにした。通常は、1人あるいは2人しか詰めていない番屋に、荒砥役所に22人配置されている用人（足軽より上級の武士）の4分の1近くを出張させたのだから、「踊る大捜査線」風にいえば、「萩野、中山口、小滝口を封鎖せよ！」である。

「萩野、中山口、小滝口封鎖できません！」と叫んだかどうかはわからないが、この大騒ぎは「笑止千万」と編者は記している（p60-61）。